

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 270 号

2024 年 10 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より (4)

自分に伝道する

内村鑑三先生は数え年 70 歳をもって永眠されましたが、私は本年 80 歳、先生よりも 10 年間既に長く生きさせていただいておりますので、あとはこれから一つ、聖書を勉強させていただきまして、そしてクリスマスに述べました如く、自分一人に伝道をしたい。もう人に説教するのは止めて自分に伝道したいとこの前のクリスマスに私の希望を述べておりましたが、いよいよその実行の第 1 年を始めたい。己に伝道するという第 1 年をこれから始めたいと思います。

従って今日の聖書講義も、これはあなたたちにするのでなくして、自分自身に聖書講義をする覚悟、心構えでこれからお話を致します。

例によりまして、このエペソ書の第 2 章を、今日は 1 節から 10 節までを兄弟に読んで頂きました。ここも非常に大切な場所で、「新生」、新たに生まれ

るという、いよいよこれから2章から4章まで、聖書の救いの信仰のことについて話し、それから後半4章から6章、終わりまでには行ないについてパウロは話します。

パウロの手紙は、いつも前半は教義、即ち信仰の話。それから後半が、行ないの問題。いつでもパウロの手紙はそうなっております。

そうですから、いつでもキリスト教というものは信仰が初めです。信仰が分からずしてキリスト教の行ないは出てこない。

永遠の命

いつも言うとおりに、キリスト教で「救い」と言いますが、キリスト教で「救われる」と言ったらどうすることかということにははっきりしておかなければいけない。「救い」という言葉はいろいろな意味で使われていますから。

私はやはりヨハネ伝に示されている如く「永遠の命を持つ」、「永遠の命をもらう」と、こういうことを言ったらよろしい。はっきりする。

パウロは「救い」という言葉をロマ書で使いますが、「救い」と言われても「救い」とはどうすることかはっきり分からない。そうでしょう。「救い」と言ったら、何が「救い」か。「悲しみから救い」でも「救い」だし、「苦しみから救い」でも「救い」と言うでしょう。だから「救われる」と言ってもはっきりしないですよ。

キリスト教で「救い」と言ったら永遠の命をもらうことです。こう言う根本的なことがはっきりして来なければ、何十年やっても駄目ですよ。永遠の命を持っているか、持っていないか、ということが自分が信者であるか未信者であるかということの決め手です。…

そして我々はこの永遠の命を欲しくない。ここにキリスト教の困難さがある。我々はこの世のものが欲しい。この世で善行をしてこの世で人にほめられたい、大きな事業をしたい。キリスト教の最も大切なことは永遠の命を持つということ。永遠の命をもらうということ。よろしいか。

福音とは永遠の命

パウロの勧めというのは、いつも初めに教えが来て、そして教えによって永遠の命をもらって、それから行ないに入る。

永遠の命を持たずしての善行は道德です。私はここで善行をすることを勧めません。私はここでは永遠の命をもらえということを勧めている。この高円寺東教会では福音とは、永遠の命をもらう。何でもらうかといったら福音でもらう。

福音といったら、はっきりしておかなければいけない。具体的に決まっている。福音、良き知らせと言ったら、神がキリストを下して十字架に付けて、我々の罪とがを滅ぼして、我々に永遠の命を与えてくださったということ、それを福音という。

はっきりしているんですよ。キリスト教の信仰というものは数学的正確さを持っている。ぼやぼやしていない。1+2 が 3 になるような、そういうはっきりさを持っている。よろしいか。

神は愛なりの意味

この「神の愛」というのはぼやっとしていない。内容がはっきりしている。キリスト教で「神は愛なり」といったらぼやっとしていないですよ。「愛」といったら、ぼやっと人に親切にというものではない。

「神は愛なり」といったら、神がキリストを下して十字架に付けて、罪で亡ぶべき我々を、我々の現在ならびに未来の罪とがを全部滅ぼして、イエスを十字架に付けて、神は我々は罪なきものとして、我々に永遠の生命を与えて下されたということ。これを「神は愛なり」という。これを「愛」という。

そうですから、現在、我々信者はサタンに引き回されているという状態と、それからサタンに引き回された我々が犯す罪を神は全て許して、それを処分して、我々に永遠の命を与えて下された、という二つの現実が我々の現実の姿です。我々はそういう二つの姿を持っている。これは死ぬまでそうですよ。

だから我々は引き回されているという。そういう汚い状態でいる人間に、神は引き回されて過ちを犯した罪、また現在犯しつつある罪、また未来における罪を全てキリストを通して十字架に付けて、我々の罪科を全て処分して、許して、我々に永遠の命を与えて下されたという。これが「神の愛」の内容でありまして、これをイエス・キリストの福音という。

罪過に死んでいた私たちをキリストと共に生かすと、我々に永遠の命を与えて下された。それで我々は永遠の命を持っている。

永遠の生命を頂いた一過去、現在、未来

何遍も言うとおりに、私らは、大正 6 年、旧制の高等学校の入学試験を受けて、試験は7月で、通ったら「君はどここの高等学校に9月15日に入学を許す」と官報で発表がある。…官報で発表があれば、そのときからもう「高等学校の学生である」と現在形で言ってもいいし、それから現在完了で、「私は今高等学校の学生になった」と言ってもよし、それからまた「もう私は高等学校の学生になったんだ」という過去形の形で言ってもよし、あるいは未来形で、「私は9月15日からいよいよ高等学校の学生になるのである」と言ってもいい。

そうですから「よみがえらせた」と言ったら、キリスト来給う時によみがえらされる者となったのだ、今君は永遠の生命をもらったんだ。

そうですから、十字架の贖いによって、我々はもうその身分を獲得している。賜物です。我々それを本当だと信じて受ける時に、我々はその位を獲得する。これを「信仰だけで救われる」という。ルッターの「信仰だけで救われた」とはこのことを言った。すべては十字架において神がもう完成した。我々の残っているのは、我々がそれを受けると受けないかということが残っている。これを福音と言う。

キリスト・イエスにあつて共によみがえらせ、共に天上に、永遠の命を頂いたのである。

エペソ書はパウロの書いた手紙か

このエペソ書というものは、獄中書簡としてパウロの書いたもの、パウロがローマにおける獄中から書いたものということになっておりますが、学者はこれはパウロの書簡ではない、これはパウロ以外の人の書であるという説が有力で、半々でありまして、まだどちらとも確定的に決まっていない。パウロが書いたか、弟子が書いたかはっきりしない。パウロが書いたということになって聖書に載っておりますが、ロマ書やガラテヤ書の如く、はっきりと学者がみんな「これはパウロが書いた」というふうには、エペソ書はなっておりません。

私は素人でありまして、私の直感は、これはパウロが書いたのではないとみる。パウロが書いたとしたら、ロマ書以前に書いた本。私はそう見る。

なぜかといったら、ここには称名が出てこない。ロマ書にはちゃんと「主のみ名を呼ぶ」ということは出てきておりますけれど、エペソ書には「主の名を呼ぶ」ということは出てきていない。そうですから、これはやっぱり私はパウロはロマ書を書いた以前に書いた。パウロが書いたとしたらロマ書以前に書いた手紙。もしロマ書から以後に出てきたものであれば、これは弟子が書いた。一流の弟子が書いた。あるいは、オーガスチン、ルッター級の、パウロの信仰をよく分かった第1の弟子が書いたものと私はみます。

全部内村鑑三から聞いたこと

私は今日のこの説教を復習、勉強させて頂きましていたら、ここに書いてあること、聖書の文句、私のこれから話しをさせて頂くこと全部、私のものというものはない。これは内村鑑三先生から教わった。内村鑑三から聞いたことです。また、内村鑑三先生以外の2、3の注解書の大先生、世界の大先生の方々の教えで、文字になっていることを私が読んだ、receiveした、受けたことだけです。私のものというのはない。

そうですから、私はこの話をしておりますけれど、まったく小西芳之助のものというのはない。全部内村鑑三から聞いたこと、その他の大先生から聞いたことを繰り返しているだけです。…

あなた方自身から出たものではなく、神の賜物である。これが、ちょうど、私の説教に当てはまる。私の説教、私の聖書講義は、私自身から出たものではなく、神の賜物である。神から人を通じてですから、内村鑑三その他の大先生、また友人、その他から、その賜物である。

do

昨日は、ピリピ書を読んでおりましたら、ピリピ書の終わりのところに、パウロ先生が、「最後に言うが、君たちが私から受けたこと、私から学んだこと、私から見たこと、私から聞いたことがあるならば、それをなせ」と。

「do」という字が書いてある。パウロ先生が、ピリピ書の最後に、君たちが私から受けたこと、私から学んだこと、私に見たこと、私に聞いたことがあるならば、それをなしなさい、do という字が書いてある。

我々が do しなかったら、もう意味がない。聞いておっても、聞かざるがごとしです。ロマ書 10 章 13 節に「主の御名を呼び求めれば救われる」とある。そうですから、主の名を呼べと、パウロ先生は私に教えてくれた。これは、パウロ先生が教えてくれたロマ書の言葉とともに、それを分からせてもらったのは恵心僧都のお言葉が大いにありますけれども、そういうことを私はパウロ先生から学んだ、「主の名を呼べ」ということを。

そうですから、私は「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶ。そういうわけでありまして、私の教えの「主の名を呼べ」というのは、私が言っているのではない。パウロが言った。パウロが勧めた。

恵み 1 本で救われる

「あなた方が救われたのは実に恵みにより信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。(エペソ書 第 2 章 8 節)

恵みというのは、これは神、キリストの恵み、これは贖いのことであります。あなた方が救われたのはイエス・キリストの贖いによるのだ、信仰によるのである。これは、度々申し上げているとおり、前の 5 節ではあなた方が救われたのは恵みによるのである。信仰と言う字がない。8 節には「恵みにより信仰による」というふうに、「信仰による」という字が付いている。

だから、われわれは恵み 1 本によるのか、恵みと信仰と 2 本立てかと、こういうふうに難しい問題が起こってくる。いつも信仰という字が邪魔になってくる。そうですから、これはたびたび言うとおおり、これは恵み 1 本です。恵みで救われる。この「信仰」というのは、「信仰」というより、「あなた方の救われるのは実に恵みにより」、「恵みによる」とした方がいい。そして、これを「受ける」、「恵みにより、これを受ける」のである。「信仰」というより、「受ける」というふうにした方が簡単でいいと思います。…

私自身が主観的に言えば、小西牧師、私は贖いによって救われている。信じるという字は不必要。…私は贖いだけなんです。私は贖いで救われる、救われている。自分の信仰というものは考えていない。

目の前に置かれる仕事を分相応に為したらいい

「神は、私たちが良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。」(エペソ第2章10節b)

われわれは、分相応に贖いを受けさせてもらう。その受けさせてもらったことによって、われわれは永遠に生きる者としていただいて、この世に存在させていただいて、そして生きさせてもらっている。われわれはこの生きている間、世にある人生において、神から与えられる毎日目の前に置かれる仕事を、われわれは神から与えられている力相応になしたらいい。

それは、人から見てどんなに平凡な、どんな取るに足りない仕事に見えてもいい。それは良い仕事です。自分で良い、悪いを判断したらいいかん。神が、ちゃんとそういうふうにして下さっている。だから、神がして下さることを毎日したらいい。

道は近きにある。ですから、これはそういうふうに関自分でえらく考えて、いいことしなければならぬ、悪いことはしない、このようにしたら、いいことになるのだと、そんなごちゃごちゃ考える必要はない。我々は、日々起きて与えられたことを、自分のなしたいことをなすにあらずして、目の前の自分の為すべきことことをなしたらいい。簡単ですよ。神がそうしてくれているんだから。

目の前に置かれたることをやったらよろしい

シュバイツァーがアフリカへ行って、土人を助けているというのはわれわれから言ったら、えらい善行に思っているけれども、むしろ運転手がけがをしないように運転していることと、どっちがいいか悪いか分かんですよ。人間の考えでは、シュバイツァーはえらい善をやっている、運転手なんか当たり前ではないか、正確に運転するのは当たり前でないかと。

家で、主婦が主人のために健康になる食事をつくっているというのと、私はシュバイツァー大先生が、アフリカでやっておられるのとどっちがいいか、どっちがいいとは言えないと思う。

各自、目の前に置かれたることをやったらよろしい。その意味は天国で分かる。この世ではわからない。天国に行ってみたら分かる。天国に行ったら、これ逆さまになっているですよ。

この世で「あんなやつは」と言っていることが、俺より上に座っている。小西先生、上にいないではないか。ずっと一番下に小西先生が座っていた。どこかと思ったら、一番前に座っていた。そういうことがあるんですよ。

主の名を呼び求める者はすべて救われる

いい悪いは、人間の考えはやめたまえ。自分の目の前に置かれた、なすべきことをなしましょう。「信望愛のうち、最も大いなるものは愛なり」とパウロは言った。そうですから、本当に我々の人生は、この世における人生というものは真剣なものだ。我々は、金儲けとか偉い人になるためにやっているのではない。天国に行ったら分かる。

今日話したことの全部、この大意は私から出ているのではない。これは先生から、友人から学んだことなんです。今日みなさんの聞いていることは、小西が俺の説教だと言って、俺がという所は、少しもない。一点もない。みんなこれは大先生から教えてもらった、習ったことなんです。

特に「わが主イエスよ」と、主の名を呼べと言うことは、ロマ書 10 章 13 節において、パウロ先生から、直接に聞いたことです。称名するということは、何か小西が勝手に称名し、「わが主イエスよ」と言っているけれど、これは小西から出ている言葉ではないんですよ。スワ子は、お父さんが電車の中で「我が主イエスよ、わが主イエスよ」と言って、恥ずかしいと、言っていたそうですが、私は言うけれど、私が言っているのではない。パウロ先生が、ロマ書 10 章 13 節において、「主の名を呼び求める者は、すべて救われる」とおっしゃった。